

張資平の戀愛小説と「病」

祝 世 潔

東京大學

はじめに

中國の現代文學は生まれた當初から、諸々な病をもつて斬新なインパクトを與えてきた。「狂人日記」(一九一八)の被害妄想から「藥」(一九一九)の肺結核、さらに一世を風靡した「沈淪」(一九二二)の憂鬱症まで、病と病人は時代の隱喩としてかつてない姿で文學作品に登場し始めた。その中でも、張資平が描いた病氣は獨特な存在感を示している。

張資平は一九一二年から一九二二年まで日本に留學し、五高を経て東京帝國大學理學部地質學科で學んだ秀才である。郭沫若・郁達夫と同じく初期創造社における重要な存在であり、二〇・三〇年代の賣れっ子作家でもあるが、低

張資平の戀愛小説と「病」(祝)

俗な戀愛小説を量産する「三角戀愛」小説家としてずっと非難されてきた。性的表現が多いことからよく郁達夫と並べて論じられるが^①、張資平のほうを貶す意見が多く、「郁達夫作品告給我們生理的煩悶、我們卻從張資平作品取到了解決(郁達夫の作品から生理的な煩悶を教えてもらったが、張資平の作品から解決を得た)」と沈從文に揶揄され、さらに「手淫小説」とまで魯迅に罵倒された^②。

張資平の戀愛小説では、肺病と性病／婦人病が頻繁に表現されている。「回歸線上」「聖誕節前夜」「公債委員」「飛絮」「約伯之淚」「蜜約」「苔莉」「最後の幸福」「天孫之女」「紅霧」「明珠與黒炭」などには結核患者が登場し、「百事哀」「Worse-Halves」「公債委員」「飛絮」「苔莉」「最後の幸福」「歡喜陀與馬桶」「愛力圈外」「糜爛」「天孫之女」「紅霧」「明珠與黒炭」「青春」には女性のヒステリーや婦人病が描かれる。

それに對し、「百事哀」「雪的除夕」「三七晚上」「小兄妹」「My Better Half」など、生活の困窮をリアルに表現した所謂身邊小説では、全く異なる病氣が描かれている。

子供の病氣が存在感を示し、發熱・腸チフス・コレラ・麻疹・猩紅熱などの小兒病が頻繁に登場する。出産や産後の苦痛などの内容も散見される。張資平の作品において、病は物語を展開させるために、いかなる役割を擔っているのであろうか。

張資平作品における肺病と性病の多用については、二つの聲が上がっている。一つは、張資平が「肺病と梅毒を亂用した」目的は「作品の肉欲を増すため」であり、當然小説の品格を下げる要因となるという批判である。^③ もう一つは病を隱喩として解讀する意見である。肺病と性病は保守的な舊道德による戀愛の阻害に由來するのではなく、むしろ自由を誇示する新道德の放縱によって引き起こされる。

そのため、病は新道德の隱喩となり、舊道德に反抗しながらもその一方で新道德に對する懸念を表しているとされる。^④

しかし、これまでの研究では、新道德に對する追求姿勢が、張資平の價值を肯定的に捉える一つの立脚點であった。徐仲佳氏の論説では、張資平は「性」という手段を以て、靈肉一致の新道德を構築することに執着すると述べる。彭

小妍氏は、張資平が「性」の本質を議論し、國家や社會を超えるユートピアを夢見ると論じている。

では、張資平は如何なる目的のもとで「病」という要素を利用し、そこにはどのような價值判斷が含まれているのか、本稿ではこの問題點を検討していく。まず、新文學の小説家による肺結核のロマン化を紹介したうえで、張資平が描いた肺結核の患者像を提示することにより、彼の獨自性を明らかにする。次に、張資平作品に登場する女性の婦人病患者像を通して、その筆で表される病氣における男性との性差を検討する。最後に、病の影に隠れている作者の文學觀を究明し、文學を通して何を表出しようとするのか、張資平の考えを探り出したいと思う。

一 男の結核

中國の新文學では、肺病が最も頻繁に描かれた病の一つである。魯迅の「藥」「孤獨者」「在酒樓上」、氷心の「兩個家庭」、郁達夫の「遲桂花」「茫茫夜」「過去」「蜃樓」「紙幣的跳躍」「東梓關」、郭沫若の「殘春」「落葉」「喀爾

美蘿姑娘」、臺靜農の「負傷的鳥」、丁玲の「莎菲女士的日記」、葉靈鳳の「肺病初期患者」「憂鬱解剖學」、穆時英「公墓」「白金的立體塑像」、巴金の「滅亡」、王統照の「山雨」などの作品には、肺病が大事な要素として物語を形作っている。^⑦

肺病、あるいは癆病は、古くから存在し、身近な病氣として認識されていた病氣である。^⑧しかし、現代文學に入ると肺病の存在感は一気に強まり、より豊かな隱喩の働きを擔うようになった。肺病は、社會・文化の衰弱または底邊勞働者の苦痛を象徴し、「社會病」として社會批判を展開させる存在として描かれ、また一方では、實現できない欲求または抑壓された自我を代辯し、眞の「我」を追い求める葛藤を表現するものとして用いられた。さらに、巴金の「滅亡」では、肺病を革命への情熱の源として語り、社會の抑壓と個人の解放を繋げる存在として描かれる。つまり、外部に對する社會批判および内面における個性の主張が、現代文學における肺病物語の二大主流と言える。

肺病テーマの急増は、現實における肺病患者の膨大な數

と關係していることは間違いないだろう。一九三六年の統計では、中國の全國總人口四・五億人のなかで、肺結核の患者數は二七〇萬人ほどもあり、毎年肺結核で死亡した人數は一三八萬人に上ったという。^⑨統計に收められた數だけでなく、十六人に一人の結核患者がいるという割合では、誰でも必ず結核の實態を目の當りにすることがあっただろう。もともと、醫療システムが國家に制御されない限り、散發の記述しか世には残らない。したがって、近代中國になつてはじめて肺結核が大流行したという確證はない。ただし、製絲業や紡績業の勃興をともなつた日本の近代化を参照すれば分かるように、都市化および過酷な集團作業が傳染病の温床となることは、ほぼ不可避な狀況であつたのは間違いない。^⑩

しかし、肺病が文學の寵兒になつたのは、患者數が多いことだけが理由ではない。林紓譯の「巴黎茶花女士遺事」(椿姫 La Dame aux camélias) および「不如歸」は、外國文學の世界に初めて觸れた青年たちに、眞っ先にロマン化された肺結核像を持ち込んだ。肺結核に罹ると高揚と疲弊

が繰り返され、顔色は蒼白いが咳きこむと逆に血色がよく見える時もあり、さらに吐血など生々しい症状を見せるため、ドラマチックな文學表現に適している。その上に、肺結核は結核菌によって引き起こされるものだという醫學的發見^⑪はすでにあつたものの、有効な治療法がなく、また細菌しても必ずしも發症はしないなど多くの不確定要素に翻弄されることは、自分ないし社會の運命に不安と困惑を持つてゐる青年の心情にびつたり合致してゐた。誘發される原因も多種多様であり、榮養不足・過勞・苦惱・戀への情熱・性的欲求不満・性的放縱など、現實批判から自己表現まで文學に幅廣い可能性を與えていたのが肺病——肺結核なのである。

スーザン・ソントグは『隱喻としての病』^⑫にて、肺結核は體を燃やす「情熱病」という隱喻を持ち、「蒼白い顔が紅潮したり」するため、美しく魅力のあるイメージを與える（一六頁）と主張する。「幸福感、食欲増進、性欲増大などは結核の特徴とひと頃は考えられていた」だけではなく、「結核は人を性欲過剰にし、異常なまでの性的魅力を付與

する」（二八頁）ともいう。張資平を含め、多くの中國青年の心を打った林紓譯「巴黎茶花女遺事」（二八九）の主人公は、まさに結核で放縱な生き方をする美人であつた。

一方、ソントグは「結核の隱喻は官能性を描きだし、情熱を掻立てるものであると同時に、抑壓を描きだしては、昇華の必要性を喧傳するものでもあつた。この病氣は『精神の麻痺』（ステイヴンソンの言葉）をひき起こすと同時に、より高い感情を人の心に満たすものでもあつた」（三七—三八頁）とし、結核がもつ、官能性を含めた情熱と、解放を求めた感情の抑壓という隱喻の兩面性を指摘する。

（二）新文學の小説家による肺結核のロマン化

新文學の小説家の多くは、結核の美的表象を取り入れ、とりわけ感情の抑壓による憂鬱という特徴を選び、か弱い「病美人」の人物像を打ち出した。

1 講這一句話的、是一個十九歲前後的纖弱的青年、他的面貌清秀得很。他那柔美的眼睛和他那不大不小的嘴唇、有

使人不得不愛他的魔力。他的身體好像是不十分強，所以在微笑的時候，他的蒼白的臉上，也脫不了一味悲寂的形容。

——郁達夫「茫茫夜」（一九三二年二月，『創造季刊』第一卷第一號，一九三二年三月）

この言葉を口にしたのは、十九歳前後の華奢な青年であつた。彼はきりつと美しい顔をして、柔和な瞳と綺麗な唇が、人を魅了させる魔力を持つてゐる。彼は體が強い方ではないようで、微笑んでゐるときも、蒼白い顔に少し悲しさと寂しさを帶びてゐる。

2 她有一雙謎似的眼珠子、蒼白的臉、腮幫兒上有點兒焦紅、一瞧就知道是不十分健康的。她叫我想起山中透明的小溪、黃昏的薄霧、戴望舒先生的「雨巷」、蒙著梅雨的面網的電氣廣告。

——穆時英「公墓」（一九三二年三月，『現代』第一卷第一期，一九三二年五月）

彼女（玲さん）は謎めいた瞳をして、顔は蒼白いが、

張資平の戀愛小説と「病」（祝）

頬に少し暗い赤みがかかり、一目で體調が優れていないのがわかる。彼女を見れば、透き通つた溪流、黃昏の薄霧、戴望舒先生の「雨巷」、梅雨のベールがかつた電氣廣告を思い起こす。

她輕輕地喘著氣、散亂的頭髮、桃紅的腮幫兒——可是肺病的徵象哪！——同上

彼女は少し苦しげに息をして、髪の毛も亂れ、桃色のほつぺは肺病を象徵している。

これらの例では、結核を患つた人物は確かに魅力的だが、情熱的な一面は目立たず、苦悶と悲哀のイメージばかり表出される。このように結核の隱喩を選択した理由は、丁峰山氏が肺結核と「相思病」における文學的隱喩の類似性で説明している。すなわち、中國の白話小説にはすでにロマンスの悲劇を象徵する「相思病」があり、肺結核にも咳・發熱や食欲不振など「相思病」と似た症状があるため、西

洋文學に流行った「肺結核」が戀愛悲劇の「椿姫」を経て、すんなり中國人の讀者に馴染んだわけである。¹³したがって、新文學の小説家が椿姫の豪快な一面を取り入れず、ひらすらに蒼白い憂鬱の結核患者を創出したのも、自然な流れとしては無理ならぬところである。

ただし、肺結核が持つ「情熱病」の一面を持ち出した作品も少數だが存在する。丁玲の「莎菲女士的日記」¹⁴と巴金の「滅亡」¹⁵が、二つの代表例である。

「莎菲女士的日記」では、情熱と欲望に明け暮れる肺病の女性像が描かれている。

3 我心像被許多小老鼠啃著一樣、又像一盆火在心裏燃燒。我想把什麼東西都摔破、又想冒著夜氣在外面亂跑去、我無法制止我狂熱的感情的激蕩、我便躺在這熱情的針氈上、反過去也刺著、翻過來也刺著、似乎我又是在油鍋裏聽到那油沸的響聲、感到渾身的灼熱。(二二二頁)

私の心は澤山のネズミに噛まれているようにモヤモヤ

し、火が燃え上がったようにも感じる。何もかもぶち壊したい。夜氣を冒してあてもなく走りたい。もう激しく揺れる感情の暴走を抑えられない。情熱で織りあがった針の筵に横になっているようで、どんなに寝返りを打つても刺される。まるで揚げ鍋のなかで揚げられるようなジュージューという音も耳に入り、全身がチリチリ焼け焦げるのを感じた。

さらに、巴金の「滅亡」では、ロマンスの方に情熱を向けるのではなく、革命の仕事に人一倍の激情を注いでいる。主人公の杜大心は肺結核のせいで、苦痛に對する感受性があまりに鋭くなっていたため、仕事に没頭することにより感情の苦しみを麻痺させようとする。

また、底邊の勞働者が肺結核・暴力・過酷な勞働に苦しむ悲惨な生活を描いたのは、王統照の「山雨」(一九三三、開明書店)である。

4 冷餓、罵詈、與足踢、鞭打的滋味、漸漸的使他們每一

個都嘗到了。蕭達子本來是癆病鬼的一付骨架……而三天中的辛苦引起他的咳嗽、咯咯的痰湧在肺部的窒悶聲音、與瘦牛的可以數得清的肋骨中一起一伏的喘聲互相和答。(二五六頁)

飢えと寒さ、罵詈雑言、蹴り、鞭打ち、彼らは全部味わわされてきた。蕭達子はもとより肺結核で骸骨のうにガリガリに痩せていたが、この三日間の苦しみに咳を引き起こされた。痰が肺に湧き上がるゴロゴロという詰まった響きが、やせ牛の浮き出た肋骨から漏れた喘息と呼應する。

ただし、少なくとも三〇年代前半までは「山雨」のように結核を労働者の苦しみとして描く作品は少数派であり、新文學の主流は肺結核のロマン化傾向であった。

しかしそのような潮流の中、張資平の作品では、肺結核は全く異なる姿で登場している。

張資平の戀愛小説と「病」(祝)

(二) 張資平における結核の醜惡化

張資平作品における結核患者像の共通點を、以下取り上げてみよう。

a 嫌惡感を招く

5 臭！X哥、你呼出的氣息很臭！她用她的小袖掩著她的鼻、蹙著眉凝望我。

看護婦每天替我在我的被褥上灑兩次香水。但她每次還是用她的袖口掩著鼻孔進來。T君進來時、也同樣的用手巾掩著鼻孔。進來後又連吐了幾口口沫。

臭？我不得不伸手向病床邊的小櫃上的香水取過來交給T君。

——「約伯之淚」(『東方雜誌』二三四、一九二六年二月)

「臭い！X兄さん、息が臭いのよ。」彼女は袖で鼻を覆い、顔を顰めながら私を見た。

看護婦は毎日布團に香水をかけてくれるが、それでも必ず袖で鼻を覆ったまま入ってくるのだった。T君

も見舞いに來る時、ハンカチで鼻を覆って入り、さらに何度も唾を吐いた。

「臭いのか」と、私はやむなく病床の脇机に手を伸ばして、香水を取ってT君に渡した。

6 他說話有幾滴涎水飛射到她的臉上來。她還聞到表兄的氣息很臭。

表兄的向外微露的兩個門齒、時時觸著她的紅熱的片頰、一股像腐敗了的死魚的臭氣不斷地流向她的鼻孔裡來。

她覺得他像蠅蟲般的在她身後蠕動、又像癩蛤蟆般的在蠢動。她同時聞著一種臭氣。

——「最後的幸福」（創造社出版社、一九二六年六月）

從兄が話しているときに、彼女の顔に唾が飛んできた。呼吸の臭い息も鼻を突いてきた。

彼の少し突き出た前齒が、時々彼女の火照った片頰に觸れ、腐った魚のような悪臭が絶えず鼻に流れ込んできた。

彼（阿和）が毒蟲のように後ろで蠢き、またガマガエルのようにもぞもぞしているのを感じた。一種の悪臭も鼻に入った。

7 ∴ 臉色象將枯的荷葉般的蒼黃。

她近來常看見他一面寫字一面乾咳、也時常聞著他的氣息發出一種惡臭來。

——「紅霧」（上海樂華圖書公司、一九三〇年十一月）

（至中は）枯れかけたハスの葉のような土色になった。

最近、字を書きながら空咳をしているところをよく見かけるし、息の悪臭も時々鼻をつく。

8 這晚上咯的血比昨天晚上更厲害了。她雙手掩住鼻孔替他揩衿上的血。

——「蜜約」（『創造月刊』一一、一九二六年三月）

今晚の咯血は昨夜よりもひどくなった。彼女は手で鼻を覆いながら襟についた血を拭いた。

以上の例でわかるように、結核患者のイメージは何より「臭い」という點が目立っている。猛烈な咳嗽や咯血などの症状はまだ悲劇性を帯び、讀者の同情を誘うことになるが、同じ症状でも口臭なら單に不快感を招くだけである。親しい友人が見舞いに來るときでさえ嫌がる顔をするが、女性と親密な行爲を交わす場面になれば、まるでホラーのように描かれる。「腐った魚」「毒蟲」「ガマガエル」などの喩えだけを見ても、結核患者が相手に與えた嫌悪感と恐怖感を感じ取ることができる。肺結核は完全に醜惡な病氣としてイメージ作りされている。

張資平本人には肺結核の罹患歴がないため、寫實性¹⁶を追求しようとするのなら、確かに外部の視線で結核患者を觀察するほうが自然な成り行きであろう。しかし、實は患者側の感受性を綴る箇所も以下のように多數存在する。

9 空氣非常的寒冷。但我的體溫陡增起來、皮膚的寒感更覺銳敏。我不住地在打寒抖。我待要站起來準備回去、但鮮血已經湧至我的喉頭來了。——「約伯之淚」

空氣は非常に寒い。でも僕の體溫は急に上がり、肌がより鋭敏に寒さを感じるようになった。僕はひっきりなしに震えている。歸ろうと立ち上がったが、もう鮮血が喉まで湧いてきた。

但我的雙頰還異常的灼熱、四肢的溫度比較平時也高得多。

——「約伯之淚」

まだ頬が燃えるように異常に熱い。手足の溫度もいつもより高い。

したがって、張資平が度々他者の口から「臭い」と嫌悪感を表明するのは、意圖的に肺結核に負のイメージを與えようとするからだと言わざるを得ない。

b 見苦しい欲望を引き起こす

スーザン・ソントグの觀點では、結核には人を「性欲過剰」にするイメージがあることに言及した。結核による欲望の増殖は、「幸福感、食欲増進」のようなプラスの表象と並べられたため、おそらく以下の光景を想定しているのだろう。

彼の秉性か、熱の所爲なのか、時々彼の眼から美しい希望の光が輝いて、心から可愛いと思ふ男へ向けて高い光を投げ掛けるのであるが、凡そ今日迄、彼を慕った男は多からうが、此氣高さに厭されて了つて自からかう思はれてゐると思つたのもあるまじく、況しや露子に惚れられた男は尙更解らぬのである。

——「椿姫」¹⁷⁾

また前文で舉げた「莎菲女士的日記」の中でも、結核の熱は熱い欲望に變わり、「私」は一段と元氣そうに見え、

精神も高揚しやすくなる。しかし、張資平に表現された肺結核では、性的欲望は陰濕で鈍くて、いつも無氣力で中途半端になり、女性に輕蔑されることになってしまう。

10 半年間以上の無節制的の性的生活把克歐折磨得像僵屍般的奄奄一息了。他也知道自己的身体崩壞了。……他覺得一身的骨骼像鬆解了般的。但他覺得近來每接觸著她、比從前更強度的興奮起來。他想這是癆病初期的特徵吧。

——「苔莉」(『創造月刊』一—五、一—六、一九二七年二月)

半年以上の無節制な性生活が克歐を歩く屍のようにさせた。體が崩壞していることは、自分でもわかつてゐる。……全身の骨が取れたようにぐったりしている。しかし最近、彼女に近づいたときに、以前よりもまして欲情する。これが肺結核の初期症候だろうと、彼は思った。

11 士雄の黏滯的、但又缺少氣力の行動陡然使她產生一種

厭悶。

士雄的無節制的要求、和他的無氣力的遲緩的舉動……

——「最後的幸福」

士雄がベタベタとくっ付いてくるが、無氣力な行動が彼女に一瞬にして嫌悪感と苦悶を與えた。

士雄の切りのない欲求と無氣力なのろとした舉動が……

12 快不要這樣！不要這樣摸摸索索的！你看你的熱度又

更加高了、昨晚上總不聽我的話……

「你近來變了心了！」日有氣無力的低聲的哀求。

——「回歸線上」（『創造季刊』二一二、一九二四年二月）

「もうやめて、ベタベタ觸らないで。また熱が上がつたんでしょ。昨日の夜、私の忠告を聞きもせず、あんな……。」

「最近、心變わりしたんだね」日は弱々しく哀願し

張資平の戀愛小説と「病」（祝）

た。

肺結核の發作に伴い、患者の體力が下がるのは當然なことであり、右の引用のような記述の方が元氣潑刺に振る舞うよりは現實味を帶びているのは間違いない。しかし、張資平の描寫は、結核患者に對する同情の餘地は皆無に等しく、寫實的と言うよりも寧ろ嫌味を込めた表現で患者を嘲笑っているかの如くである。「情熱病」とされる肺結核は人體を燃やして死へと加速させるものであったはずだが、張資平に提示されるそれは不完全燃焼のまま、慘めさだけが殘されている。

c 精神の狂亂を誘發する

張資平に書かれた結核患者は、體が衰弱しているだけではなく、心も病氣によって餘裕を失つてしまふ。「約伯之淚」の主人公は結核で戀愛に踏み出せず、かといつて一人で死ぬのは悔しくて、近所の小娘を追連れにしようとする邪念を持つに到る。

13 我自己知道我的病無恢復的希望了，我自暴自棄的想早點結束自己的一身。但同時希望著能有一個人和我一同死。

自分の病氣はもう回復しようもないことはわかってい
る。自暴自棄になって早く命を終わらせた。しかし、
一緒に死んでくれる人がいてほしい。

但是另一個我，常在催促我早點覓個機會向鄰家的少女要
求接吻，把病毒傳染給她。

かしもう一人の自分が、常に近所の少女に口づけを
求め、ウイルスを彼女に移すよう催促している。

我的變態心理幾次逼著我想去要求她的生命爲我的犧牲。一
種欲逼著我想去和她接吻。

私の變態心理が幾度も彼女の命を犠牲にするよう無理
強いしてきた。一種の欲が彼女と口づけを交わすよう
追い詰めた。

「紅霧」における至中も結核患者で、變態的な性癖を持
ち、さらに主人公の麗君に暴力を振るうほどである。「蜜
約」のCは愛人と旅館に泊まるが、結核で愛人に距離を取
られてしまうと、また家にいる妻を懐かしく思うようにな
る。

張資平は厭な口臭・見苦しい欲望・精神の狂亂という三
點を持って、新文學の世界で高尚かつ美しい結核のロマン
チックなイメージを逆轉させる。しかし、正岡子規の「病
牀六尺」に見られるように、身に感じた苦痛と煩悶を如實
に示すような寫實的手法も用いていない。彼は肺結核を醜
惡な欲望が身體に投影する隱喻として、ロマン派と正反對
の方向を歩んでいるのである。

以上に取り上げられた例でもわかるように、張資平作品

における結核患者はだいたい男性である。張資平の戀愛小説では、男性と女性とではかかる病氣にはつきりとした性差が見える。以下、張資平が女性に患わせる病氣を紹介しよう。

二 女の婦人病

(一) ヒステリー

「苔莉」では、戀と肉欲に溺れた主人公二人はともに健康を犠牲にしたが、男の克歐は肺結核と神經衰弱、女の苔莉はヒステリー症と婦人病にかかったと、克歐が判斷する。克歐の症狀には、不眠・盗汗・頭痛・疲勞・腰痛などがあり、さらに性欲の高揚が現れ、挙げ句の果てに血痰が出る。苔莉の症狀としては、腰痛・下腹部の痛み・頭痛・月經不順などが挙げられる。

しかし、肺結核及びヒステリー症という結論を下すのは醫者の診斷ではなく、克歐独自の判斷であるという點に注目したい。克歐は結局血痰を吐き、恐らく肺結核で間違いないが、苔莉は腰痛と頭痛だけ抱いたまま心中し、二人

とも最後まで醫者に診てもらうことはなかった。實は、疲勞・腰痛や頭痛などほぼ症狀が共通していた當初から、自分分は肺結核で、苔莉はヒステリー症だと、すでに克歐は思いつ込んでいた。つまり、肉欲が男に肺結核、女にヒステリー症をもたらすというのは、作者によって最初から設定されていた既定路線というわけである。

それにしても、克歐が苔莉をヒステリー症として斷定するしかたはあまりに輕率なものと言わざるを得ない。フロイトの『ヒステリー研究』が一八九五年に出版されて以來、日本でもヒステリーの紹介書・研究書が數多く現れ、張資平も、心理學や醫學に精通していたわけではないものの、理論自體は認識している¹⁹。しかし、張資平は精神分析的な手法など一切使わずに、苔莉が泣いただけで、「彼女がヒステリー症を患ったとわかっている（他知道她是患了血斯得利症）」と結論づけるのだ。

「苔莉」以外にも、張資平の戀愛小説では、女性は容易くヒステリー症に斷定される。

まず、女性は性的に成熟した後、性的に圓滿な戀愛生活

がなければ、ヒステリー症になるという描寫がある。

14 近來因生理上久熟了的關係而起的性的苦悶和由性的苦悶而起的不自然的情慾遂行症把美瑛從精神的和肉身的雙方苦迫得厲害。她近來雙頰愈形瘦削、臉色也愈見蒼白；歇斯底里症也愈見沉重了。——「最後的幸福」

生理的な爛熟期が引き起こした性の苦悶と、苦悶が引き起こした不自然な欲の遂行が、精神的にも肉體的にも美瑛を壓倒している。最近は頰がいつそう痩せこけ、顔色もいつそう蒼白く、ヒステリー症もよりいつそう深刻になった。

また別の作品では、女性が婚約者に裏切られ、婚約の撤回を提案したら、それはヒステリー症がゆえの決斷だと言われる場面もある。

15 你今晚上會說出取消婚約的話來、第一因爲你有歇斯的

里病、第二你還沒有深信我。……你的神經近來很衰弱的樣子、還是早點睡的好。

——「飛絮」（創造社出版社、一九二六年六月）

君が今晩は婚約撤回の話を持ち出したのは、まずはヒステリー症にかかっているからだ。そしてまだ僕を信用してくれていないからだ。……最近、ちよつと神経が衰弱氣味になっているみたいだけど、早めに寝たほうがいいよ。

その他の作品にも、圓滿そうな結婚を果たすも、不誠實な夫が「私」の姉と私通し、さらに夫と姉との間にできた子供を養子にするよう頼まれるような事態に至っても、感情を曝け出した時點で、「私」はヒステリー症だと自ら反省するといった描寫がある。

16 我的失望、我的悲恨、我的憤怒、一切的感情使我動搖起來。波濤澎湃般的血潮追著我坐立不穩了。……我愈哭著

鬧、神經就愈激動。我的確是患了歇斯底里症。

——「愛力圈外」（上海樂華圖書公司、一九二九年十一月）

失望・悲しみ・恨み・怒り、全ての感情が私を揺り動かした。私は怒濤のような情熱に迫られ、居ても立つても居られなくなった。…泣き暴れるほど神經が鋭くなる。私は間違ひなくヒステリー症になっているのだ。

まるで女性の感情は全てヒステリー症に由來すると斷定できるかのようなうた。そもそも、ヒステリー症の語源は古典ギリシア語における「子宮」であり、西洋では、ヒステリーは子宮の不調に起こされるものと古來から信じられてきた。子宮を持つてゐる限り、ヒステリー症から逃れることはできないと、張資平も考えていたのかもしれない。

このような病の描寫に投影する、作者の性差意識については、後で再度觸れることにしたい。ここで引き續き、他の婦人病に關する描寫を檢討してみることとする。

（二）花柳病・婦人病

張資平が描く作品では、性的な苦悶や夫婦關係の不滿は女性にヒステリー症をもたすが、性的放縱もまた女性に花柳病や婦人病を招いてしまう。「苔莉」「最後の幸福」「青春」「糜爛」「天孫之女」「紅霧」などでは、複数の男性を相手にした女性主人公は性病または婦人病にかかり、體が崩壊する結末となる。

例えば、「天孫之女」（上海文藝書局、一九三〇年七月）では、主人公の花子が轉々と男に賣られ、出産後ほどなくして賣春を強いられた結果、子宮の奇形と慢性子宮内膜炎にかかる。同じ賣春婦の文子も花柳病にとりつかれて借金がたまり、賣春の地獄から抜けられない。「糜爛」（上海樂群書店、一九三〇年一月）では、主人公の秋霞が複数の男性と關係を持ち、生計のために裸モデルや賣春婦同然の踊り子にまで身を落とし、金錢と肉欲を追い求めて「滿身暗病」つまり性病にかかったと暗示される。「最後の幸福」では、主人公の美瑛は夫が肺結核で死んだ後、妹の夫と姦通するも、妹の夫の子供を妊娠したまま他の男と結婚し、二番目

の夫から梅毒を移される。

肺病などと違い、性病や婦人病の症状は極めて私的體驗であり、一般的な文學的美意識とかけ離れるため、文學における登場は少なく、今日に至っても文學の中で表現されることは憚られがちである。そのような一般的狀況に照らすと、張資平は女性から罹患の體驗談を聴取したのか、醫學書を調べたのか、婦人病の症状に随分詳しいようである。例えば、「紅霧」には、淋病に引き起こされた子宮内膜炎の症状を、以下のように詳細に描いている。

17 知道他是患了什麼毛病、已經傳染到她身上來了。天氣漸漸地熱起來了、她也愈覺得身體不如從前了。不單腰部常常會酸痛、近來下腹部也時時隱隱地作痛了、多行了幾步、便像會掉下來般的。至於頭腦、差不多是每天都在發暈、暈得什麼事都不能做。

彼が何かの病氣を自分に移したことに氣づいた。だんだん暑くなってきたが、體調も日に日に悪くなってい

る。腰もよく凝って痛いし、最近はお腹部までキリキリと痛み始めた。少しでも歩くと、落ちてくるような鈍痛が走る。頭は毎日のようにくらくらして、何もできないほど眩暈がする。

她的頭腦內部、便象給鉸剪刺著般地激痛。

頭の中では、ハサミで刺されたような激痛が走った。

她坐著癡想了好一會、下腹部忽然抽動了一下、便起了一陣腹痛。她忙跑進廁所裏來、在廁所里蹲了一會、淅淅瀝瀝地下了一陣液體。她忙低下頭去檢視一下、是一種黃白色的黏液、還混有些象蛋殼蛋白間的皮膜一樣的白膜片、同時發散出一種奇臭。

彼女はぼんやりと思いふけていたら、下腹部からねじれるような痛みが走った。急いでトイレに駆け込み、しばらくしゃがみこむと、たらたらと液體が降りてき

た。俯いて確認すると、黄白色の粘液には、卵の殻と白身の間にある膜みたいなものが混ざり込み、そして悪臭を放っている。

このようにトイレ内の光景まで描き出すほどリアルな性病の表現は、五四以降の新文學には他に見当たらない。そもそも、性病という要素を取り扱う新文學の数はさほど多くない。その理由は、「環境の影響があるとはいえ、最終的には個人がみずから招いた病であり、墮落と腐敗がもたらした病として描かれる」性病は、倫理上の価値判断という構圖のもとでしか語れないからであろう。その上、「賣春や娼婦のテーマとつながりが深いし、性、愛、欲望という身體の根元的な次元と絡んで、しかもそれらを無効にしてしまう危険な病である」²¹ため、自由戀愛を謳歌する五四文學においても、文學を個人から社會に轉向させるよう呼びかけた革命文學や大衆文學においても、性病は扱いづらいテーマであった。このような性質を有するため、それが文學作品に現れる場合には、だいたい社會批判の隱喩とし

て登場することになる。

例えば、蔣光慈の「衝出雲團の月亮」²²では、女主人公の王曼英が革命の失敗で幻滅し、肉欲を追いて賣春婦になり、性病にかかったと思ひこみ、自殺を圖る。しかし、革命の道に戻るよう決心した後には、性病が誤認だと判明し、結局身も心も一新され、革命家の男性と縁を結ぶ。この小説では、性病は明らかに「革命―反革命」という構圖の中で、革命に背いた墮落生活の象徴として描かれ、結局革命とともに、或いは革命によって治癒されることになる。同じく蔣光慈の「麗莎的哀怨」²³における麗莎の梅毒も、茅盾の「追求」²⁴における章秋柳の梅毒も、同じ「革命―反革命／進歩―墮落」の構圖で解讀することができる。

さらに、老舍の「月牙兒」²⁵、丁玲の「我在霞村的時候」は、性病を民族の苦難として表現する。「月牙兒」の「我」は、經濟の困窮で賣春生活を始め、性病が發覺した時に死を覺悟したが、死ぬまでは地獄の生活を續けるしかない。「我在霞村的時候」の貞貞は日本軍に強姦されたが、情報傳達のために幾度も娼婦として日本軍のもとに派遣さ

れ、梅毒で鼻まで腐り、村の中で嫌惡の對象となり疏外される。この「我」と「貞貞」は「虐げられた人びと」の象徴であつた。性病は性的欲望と切り離され、民族の受難というより大きな構圖の中で、苦難の投影として描かれたと捉えていいだろう。

このように、隱喩としての性病が民族の受難・苦難の投影として扱われる新文學の流れの中で、張資平はただひたすら男女關係という閉じた枠組みの中で性病を赤裸々に描き、個人の身體の範圍を超えた意義を病氣に與えない。わざと苦痛を伴う醜惡なイメージを女性の病に付與する様は、男性の肺結核を扱うときに並行する創作姿勢を感じさせる。

(三) 妊娠・流産・出産

張資平作品における女性の非健康状態をさらに考察してみると、もう一つのジャンルを無視することができない。それは、女性の妊娠・流産・出産である。複数の男性を相手にする女性に課せられた罰が花柳病だとしたら、男性一人とでも不道德な關係を持っていたら、妊娠という不調が

必ずと言っていいほど課せられる。

張資平作品における妊娠は、だいたい不倫關係の報いである。そのため、妊娠の告知に使われる表現は往々にしてネガティブである。例えば、「一班冗員的生活」(『創造季刊』一—三、一九二三年二月)では、「身體失了常態(體が常態を失つた)」で妊娠を表現し、「上帝的兒女們」(『創造季刊』一—一／一—四／二—一／二—二、一九二四年)では、「體の變化」に「驚懼異常(驚懼極まりない)」という反應を示している。告知された男性も、「一班冗員的生活」の程君みたいに直ちに逃げようとするか、「梅嶺之春」(『東方雜誌』二—二〇、一九二四年十月)の叔父のように嘆くばかりで女性の力には全くなならない。

女性の流産や出産はさらに病と同じ感覺で描かれ、時には他の病氣と併存して女性を襲う。「Curacoa」(『創造月刊』一—一、一九二六年三月)では、流産した靜媛が息も絶え絶え、「頸も腕も汗まみれ」になり、目の前が真っ暗になる。「公債委員」(『不平衡的偶力』、一九二七年四月)の阿歡は主人公の暴力を受けて流産し、流行性感冒・結核にか

かつて命を落とす。「飛絮」では、産んだ赤ん坊に死なれた「姨母」は、肺結核で咯血して永眠する。「最後の幸福」や「天孫之女」では、流産・出産と花柳病・婦人病とともに女性の體を崩壊させる元凶として描かれている。

さらに、病氣と妊娠が非常に似た症状を示す表現も目に止まる。「最後の幸福」では、「頭痛・腰痛・下腹部痛・目眩」という症状からは、婦人病か妊娠か判明できないと醫者に言われる。「愛力圈外」では、實は妊娠した姉が、ヒステリー・胃病・月經不調など様々の病氣として複数の醫者に診断される。ここで妊娠がヒステリーに循環する。つまり、妊娠は婦人病ないし女性の神経症と同じく、子宮由来の病氣だと考えられていると思われる。

注意すべきは、「公債委員」における阿歡の流行性感冒・結核および「飛絮」における「姨母」の肺結核である。これらは、女性にして子宮に關わらない病氣にかかった稀なケースである。しかし、男性が生まれ持つてその因子を有した結核と違い、女性の結核はやはり流産や出産という子宮に關わる病氣とともに發症し、そこから由來している

ように描かれる。女性の全ての不調は子宮から由來するという張資平の考え方を裏付ける。

では、張資平の戀愛小説に繰り返し登場した「病」は、一體どのような意味合いを持っているのか、以下の章で検討してみよう。

三 病…欲望の投影と懲罰

(一) 遺傳される結核

肺結核を招く原因については、西洋では古代ギリシアから遺傳説と傳染説がある。遺傳説は四體液説と關わり、肺病が儂い運命の美人を生むという説や、天才はみんな肺病だという説を導き、これらは西洋における肺結核のロマン化を支える思想である。

中國醫學では、結核という西洋醫學における概念にびつたり合致するような病名がなく、「虚勞」「虚損」「吐血」「咯血」「咳嗽」「肺痿」「肺癰」などの諸病症から慢性肺結核に對應する症状を見つけることができる。^{⑨)} 明の王綸著

『明醫雜著』には、典型的な肺結核の症状が次のように記載される。

男子二十前後、色慾過度、損傷精血、必生陰虛火動之病、睡中盜汗、午後發熱、哈哈咳嗽、倦怠無力、飲食少進、甚則痰涎帶血、咯吐血、或咳血、吐血、衄血、身熱、脈沉數、肌肉消瘦、此名勞瘵。

男子が二十歳前後において、色慾が過度のために精血を損傷し、必ず陰虛火動の病が生じる。睡眠中に盜汗が出、午後に發熱し、倦怠して力なく、飲食が進まざるはなほだしくは痰に血を帯びるようになる。唾に血が混じったり、また血を吐いたりするようになる。^①血を咳き出したり、吐いたり、鼻血が出たりする。脈は重く取って初めて觸れることができるし、脈拍が早い。身が熱くなり、肌や身が痩せ衰える。これが勞瘵と呼ばれる。

つまり、東洋醫學では、「勞」という命名からも分かるように、肺結核を物理的あるいは精神的な過勞の結果として考えてきた。特に、性的放縱が體のバランスを崩し、結核を起す直接的な原因になり得る。もちろん、結核菌を發見した現代醫學の觀點で考えると、西洋の遺傳説では生まれつきの免疫力が弱いため結核菌に對抗できず、他方東洋の過勞説では過勞による免疫力の低下で保菌状態から發作を引き起こす、という解釋ができる。しかし、西洋と東洋の學説では、原因と結果が逆になっていることがうかがえる。

西洋醫學では生まれつきの結核は原因で、欲望は結果である。それとは正反對に、東洋では欲望は原因で、結核は結果となる。言い換えれば、結核になるのは運命か、自己責任かの違いである。

張資平は主に西洋の宿命論を取り入れて肺結核を描いていると思われる。というのも、肺結核を患う男性主人公は「苔莉」を除けば、全員遺傳でウィルスを受け継いでいるのである。

母親、母親、你看見你的兒子患這樣的病、你的腦中就不斷地描想著父親咯血而死的情狀吧。——「約伯之淚」

お母さんよ、息子の様子を見れば、お父さんが咯血して死んだ光景がしきりに浮かび上がってくるだろう。

聽說表兄的父系一連四五代都是患這種病死的。

——「最後的幸福」

從兄の父方は、四、五世代にわたって例外なくこの病気で亡くなったそうだ。

萍初的父親在南非洲患很重的肺結核病、……本年的初秋、吳萍初受了他的父親的遺傳、也患了咯血症。

——「聖誕節前夜」〔東方雜誌〕二二一八、一九二四年四月）

萍初の父親は南アフリカで重度の結核になった。……今年の初秋になると、吳萍初も父親の遺傳で咯血症に

張資平の戀愛小説と「病」（祝）

なった。

「他的身體這樣白胖胖的、也有肺癆病嗎？」

「那是遺傳病。他的父親是患肺癆病死了的。他也患初期的肺病、那一個不曉得。」——「紅霧」

「こんなにはちやりしているのに、肺結核なの？」

「遺傳なのよ。父親は肺結核で死んだんだから。彼も初期の肺病にかかっていることは、みんな知っている。」

もつとも、結核という隠喩は「放蕩の責任論など度外視したまま性的感情を描寫する便法の一つでもあった」と指摘されている。郁達夫作品の主人公も、欲情の原因を肺結核に歸する考えを持っているが、純真無垢な女性や美しい風景に救われ、自分で邪念を収めた結果、病氣まで好轉するケースもあった。病氣は欲望が身體に投影する化身であり、邪念が消滅したら、病氣まで治ることになる。

しかし、張資平の場合は、郁達夫と違い、18の四つの例では、結核患者はみんな遺傳でウイルスを受け繼いでいる。後天的な救いは一切ないように描かれ、欲望に流されたまま、破滅のどん底に落ちていくだけである。肺結核と性欲が絡みあい、「遺傳で肺結核↓強い性欲↓性的放縱↓肺結核の悪化↓破滅」と進展する。この破滅への圖式では、肺結核と欲望が主であり、人間は肺結核と欲望の奴隸になる。欲望を生み出せる肉體を肺結核に献上する以外、人間の主體性は存在しない。

その結果、欲望の投影として存在する肺結核が、醜惡で嫌惡感を招く病氣であればあるほど、欲望それ自體が醜惡なものであることを意味することになる。張資平は作品の中で「戀愛の花が咲き誇った園に戻って、裸で彼女と手を取り合つて踊³⁴」れる、欲望を自由のままにできるユートピアを夢見ているように見えるが、肺結核という病氣はむしろ欲望を實踐するが故に人間を壊滅させるのである。

(二) 男女の性差

張資平の戀愛小説において、病が欲望と深く絡んでいることは男女共通であつた。しかし、病と欲望の因果關係は往々にして男女で正反對に現れる。「苔莉」を除けば、男性主人公の肺結核は皆遺傳であり、肺結核に罹つたがゆえに性欲が不自然に高ぶつてしまふ。それに對し、女性のヒステリー症は花柳病・婦人病とともに欲望がもたらした結果である。欲望の抑壓はヒステリー症を引き起こし、欲望の放縱はまた花柳病・婦人病を引き起こす。さらに、不道德な性關係による妊娠・流産・出産も女性にとつて最も陥りやすい「病」である。女性が肺結核（「飛絮」）や流行性感冒（「公債委員」）にかかるのは、流産や出産が誘發した結果である。つまり、男性の場合、病は原因であり、欲望は結果であるのに對し、女性の場合、欲望は原因であり、病は結果であるといえよう。

張資平によれば、女性の欲望は子宮から由來するが、欲望が病を招き、結局病は女性の子宮に戻る。女性は子宮を持つてゐる以上、欲望も病も免れない運命である。このよ

うな考えはもちろん張資平の獨創ではなく、むしろ十九世紀のフランスにおける「科學的」な知識であつた。小倉氏³⁵によると、十九世紀には、臨床醫學の誕生に伴い、女性の病氣を子宮に還元することは科學的な言論となり、醫學書にも「女性」という項目が設けられた。その例として小倉氏は、フランスを代表する歴史家ジュール・ミシュレが、「女とは何か。それは病氣である」と述べ、「女は愛されたいと願う。女は愛と母性の器官で悩む。したがって女の病氣はすべて、直接にせよ間接にせよ子宮の反響なのである」と主張することを紹介する。張資平の「女性Ⅱ子宮Ⅱ欲望Ⅱ病」という論理は、このような「科學的」言説に呼應する。

さらに一步進んで解讀すると、張資平の描いた男女關係では、男性の性欲は病態であり、女性の性欲は常態であると言えるのではないだろうか。女性が常に男性にとつては病的な性欲を持つ、という考え方は典型的なミソジニー（女性嫌惡）である。同じく女性の欲望を表現しても、自分の欲望を探り、性的苦悶を吐露する同時代の女性作家と

は全く異なる立脚點に立つことは明白である。

（三）病という懲罰

五四以降、人間性の解放が聲高に叫ばれるなか、自由戀愛も新文學の主なテーマとなった。しかし、優生學に根ざした自由戀愛は從來の家族制度と倫理道德に對抗する武器として使われる一方、個人の身體は私的なものではなくなり、社會・民族の枠組み内に收められる、というパラドックスが現れる。一九二〇年代末以降、革命文學や左翼文學はさらに個人の情欲を革命というフレームワークに織り込み、「革命＋戀愛」、「戀愛より革命」など、革命に身體を位置付ける努力をした。

身體を私的なトポスに戻そうと試し始めたのは、三〇年代における上海の「現代」派である。李自芬氏は次のように指摘した。現代派のメンバー、豫且とさらにその後の張愛玲などの「海派」作家は、時代の流れにおける個人の身體體驗に注目し、作中の身體は民族・國家の意義を擔わなくなった。さらに、物語を展開させる原動力は身體の欲望

と現實との衝突となり、その中で人間は道德という重荷と民族社會の足枷から脱出し、個人の欲望に驅使される個體になる。結果、清末民初以來ロマン化された戀愛は徹底的に分解され、現實生活に蝕まれた平凡で退屈な日常の情欲になってしまった。³⁵⁾

個人の情欲はもともと戀愛や結婚の自由と結びつけられ、社會に對抗する構圖のなかで正當性を主張したが、戀愛結婚の自由を一部の人が達成することになるともない、かえって據り所を失うことになる。家庭内で欲望の満足が果たせない人に責任を迫ることは、打破すべき舊來の家族制度の價值觀に立ち戻る懸念が生じる。そこで、「革命＋戀愛」の圖式を踏んだ文學は、個人の欲望を革命の情熱に導くという解決策を打ち出す。³⁷⁾ 海派文人であれば、「戀愛神聖」の幻影を打ち破って欲望を自由にさせる手段を講じる。

海派の一步手前に立った張資平は、早くも二〇年代の前半から戀愛の影に隠された欲望を嗅ぎつけていた。しかし、個人の身體を社會革命の構圖に獻上することが濫り、身體を道德から解放する勇氣も持ち合わせていない。彼は一九

一二年から一九二二年にわたって日本に留學し、東京の「魔窟」に探検したこともあり、商品化された身體を見慣れていたはずである。ただし、都市文明を當たり前に受け入れた「海派」と違い、廣東梅縣の客家人として生まれ育った張資平は、やはり欲望を堂々と宣言することができないように見える。

それがゆえに、彼は一步下がって、性欲の存在を認め、戀愛や結婚の自由が達成されても欲望は満たされない現實に傾斜し、そこに含まれた不條理を批判する立場を示す必要性感じた。しかし、道德そのものが相對化された時代では、いかなる道德批判も正當性を缺く上に、時代遅れの說教に見えてしまう。張資平作品に登場する男女の多くは、欲望の正當性を裏付けるために、自分に都合よく舊道德あるいは新道德を利用する。例えば、「最後の幸福」では、美瑛は金に目が眩み、「親の言い付け」という口實で貧しい楊松卿を拒絶するが、一方で「社會や道德に束縛されずにすべての欲望を満足させる」權利があるとして、妹の夫と不倫關係を結ぶ。道德の基準が欲望次第でころころ變わ

るのであるから、いかなる道徳批判はもはや何の効果も果たさない。

その結果、病が性的不道徳を裁く最後の手段となった。身體の欲望に耽った人物にとっては、身體という次元の罰が最も有力で逃れられない。張資平の戀愛小説からは、「病を以って不道徳を懲罰する」という構圖が見え隠れする。この構圖は、因果應報の傳統的パターンに回歸するように考えられるかもしれないが、先ほど解讀したように、病もまた欲望の投影に過ぎず、人間はあくまでも欲望に左右される受動的な客體である。つまり、人間の肉體は欲望に支配される客體であり、欲望が引き起こした罪によって罰せられる運命から逃れない、というペシミズムな文學觀にたどり着く。

おわりに

以上、張資平の戀愛小説における病のイメージを取り上げ、肺結核や婦人病に反映される張資平の文學觀を論じてきた。病が欲望の投影および欲望に對する懲罰として描か

れると、人間の主體性は否定され、人間は欲望を盛る容器として生きるだけである。當然、このような文學觀は主流であつた新文學に受け入れられるはずもない。

文學評論家の李長之が張資平の小説を論じる際、以下のように指摘している。⁹⁴

一般人往往以爲張資平的小説有挑撥性、我看並不是、他描寫性慾滿足後的無聊、煩悶、痛苦、幾乎是否定了性慾似的。只是認定那是自然的欲求、仿佛是一種不可逃掉的壓迫。

張資平の小説は往々にして挑發的であると思われるが、私はそうは考えない。性欲が満足された後の退屈・煩悶・苦痛を描き、まるで性欲を否定しているようだ。自然な欲求だと認定し、逃げられない壓迫のようなものだ。

李長之に指摘されたように、張資平の小説世界では、欲望が満足できなくて苦しむよりは、欲望が満足されてなお

苦しむほうが普通である。結局、物欲と性欲を追い續けて、より不満足の空虚さに陥っていく。このような欲望に對するひねくれた取り扱い方は、個人の身體が近代化されるなかで生じた張資平の價值觀の葛藤でもあろう。

張資平の執筆は主に一九二〇年から一九三三年までの期間に集中するが、まさに青年が革命の情熱と失望に翻弄された時期である。文學においても様々な流派や主張が飛びかい、文學の役目をめぐる論争は止まることがなかった。

張資平は終始個人の身體を革命の枠組み内に収めることはしなかったが、都市化と商業文明に置かれた身體の近代化・欲望の自由化を表現することに長けていた。彼の作品に繰り返し現れた郷土の評価に對する配慮からもわかるように、近代的で自由な身體觀を鵜呑みにすることにも幾分の抵抗を示している。それでも、長年日本に留學した張資平自身にとって、身體の自由もなじみ深いものであった。

結局、傳統と近代の狭間で身體と欲望の出口が見つからず、「病」という逃げ道で道徳批判を下すしかなかったと言うことができるかも知れない。

遺傳の宿命論を強調し、遺傳された病氣という呪いから逃げられない、というのは十九世紀におけるフランス自然主義文學の常套手段であった。しかし一方、病を不道德の性欲を批判する武器として用いるのは、傳統的な道徳批判の色彩を帯び、自然主義の道を踏み外すことになる。「病」は、張資平の自然主義文學に對する受容と反逆を検討する糸口になるかもしれない。これは次の課題となる。

註

- ① 沈從文「零星・郁達夫張資平及其影響」(『新月』一九三〇年、第三卷第一期)、徐仲佳「郁達夫張資平戀愛觀差異論」(『齊魯學刊』二〇〇三年第四期)。
- ② 魯迅「後記」(『偽自由書』、一九三三年、上海北新書局)。
- ③ 「濫用肺病・梅毒・亂倫等來加強作品的肉慾感……都是張資平惡劣的地方。」(錢理群等『中國現代文學三十年』、北京大學出版社、一九九八年、三三二頁)。
- ④ 譚光輝「症狀的症狀・疾病隱喻與中國現代小說」(四川大學博士學位論文、二〇〇六年)、一六三—一六七頁。
- ⑤ 徐仲佳「新道德的描摹與構建——張資平性愛小說」(『中國文學研究』二〇〇四年一期)。

⑥ 彭小妍「張資平的戀愛小説」(『海上說情慾…從張資平到劉呐鷗、中研院文哲所、二〇〇一年』)。

⑦ 作家群にも肺病を患った者が多く、魯迅・郁達夫・蕭紅・蔣光慈・無名氏・韋素園・老舍などが挙げられる。作家自身や家族・友人の實體驗は、肺病を文學の素材にした大きな原動力でもあると考えられる。

⑧ 中國最古の症候學・診斷學醫書『諸病源候論』(隋)には「虚勞」があり、挙げられた多くの症状は西洋醫學における結核の症状に相當する。

⑨ 何玲「西醫傳入中國—結核病案例研究(1900-1967)」(上海交通大學博士學位論文、二〇一一年、一頁)。

⑩ 小松良夫『結核—日本近代史の裏側』(清風堂書店、二〇〇〇年)、六三—一〇三頁。

⑪ 結核菌は一八八二年にドイツの細菌學者のロベルト・コッホによって發見された。中國においては、一九〇〇年に編纂された『衛生學問答』(丁福保)にも結核菌の概念に相當する「肺癆蟲」の傳染説が既に見られる(注⑨參照)。

⑫ スーザン・ソントグ『隱喻としての病い』(富山太佳夫譯、みすず書房、一九九二年)。引用に付すページ数は本書に據る。

⑬ 丁峰山「肺結核替換相思病的文學史指標意義」(『東南學術』二〇一五年第五期)。

⑭ 丁玲「莎菲女士的日記」(『小説月報』第十九卷第二號、一

張資平の戀愛小説と「病」(祝)

九二八年二月)。

⑮ 巴金「滅亡」(『小説月報』第二十卷第一—四號、一九二九年)。

⑯ 錢杏邨が「他是如一個科學者一樣、很精細的從各方面去考察、去描寫——描寫得異常深刻。(彼は科學者のように、各方面から精確な考察と描寫を行う。その描寫は極めて奧深い)」と張資平の寫實性を評價する。「張資平的戀愛小説」、「張資平評傳」、史秉慧編、一九三三年四月現代初版、一九三六年七月開明三版)。

⑰ 長田秋濤譯『椿姫』(早稻田大學出版部、一九〇三年)、一四七—一四八頁。

⑱ 柄谷行人「病という意味」『定本 日本近代文學の起源』、岩波書店、二〇〇八年)は『病牀六尺』は苦痛を苦痛としてみとめ、醜惡さを醜惡さとしてみとめ、『死への憧憬』のかわりに生に對する實踐的な姿勢を保持している」(一五〇頁)と評し、つまり、子規は同時期の「不如歸」と違い、結核をメタファーとしてではなく、醫學の意味における「病」として提示している。

⑲ 「紅霧」には、大學講師に就任した日本育ちの嚴子璋が、たどたどしい中國語でフロイトのヒステリー少女の研究を紹介する一節がある。

⑳ 小倉孝誠『身體の文化史…病・官能・感覺』(中央公論新社、二〇〇六年)、一五九—一六一頁。

- 21 同右。
- 22 一九二九年十月執筆。『蔣光慈文集』第二卷、上海文藝出版社、一九八二年。
- 23 一九二九年四月執筆。『蔣光慈文集』第三卷、上海文藝出版社、一九八二年。
- 24 一九二八年四月—六月執筆。『茅盾全集·小說一集』、人民文學出版社、一九八四年。
- 25 『櫻海集』、人間書屋、一九三五年八月。
- 26 『中國文化』第三卷第一期（一九四一年六月）に掲載。
- 27 「一班冗員的生活」…「知道他的懷疑竟成了事實，他棄綾英之心愈堅決了。」
- 28 「梅嶺之春」…「叔父覺得自己的雙頰及額都發著熱……只歎了一口氣。」
- 29 福田真人『結核という文化』（中央公論新社、二〇〇一年）、二八頁。
- 30 同注九、二七頁。
- 31 以上の譯は『結核という文化』（福田真人、中央公論新社、二〇〇一年、七二ページ頁）による。
- 32 同注十二、三七頁。
- 33 郁達夫「到我遇見她之後、約莫將十幾天的時候、我的頭腦心思、完全被她攪亂了。聽說有呼吸器病的人、欲情最容易興奮、這大約是真的（僕の頭と心は、彼女にめちやくちにされた。呼吸器系の病氣にかかっている人は、性的に興奮しや
- すいと言われるが、これは事實であろう）」（過去）、『創造月刊』第一卷第六期、一九二七年二月。
- 34 「還是回到我們固有的滿植著戀愛之花的園中去和她赤裸裸地臂攬著臂跳舞吧！」（『苔莉』）。
- 35 同注二〇、一八—二三頁。
- 36 李自芬「個人身體敘事…日常男女欲望的表達」（『現代性體驗與身份認同…中國現代小說的身體敘事研究』、巴蜀書社、二〇〇九年三月）。
- 37 賀桂梅「革命／戀愛…欲望的替代與轉移」（『女性文學與性別政治的變遷』、北京大學出版社、二〇一四年）。
- 38 張資平「我的創作經過」（『文藝創作講座』一九三二年第二期）。
- 39 李長之「張資平戀愛小說的考察——『最後的幸福』之新評價——」（『清華週刊』一九三四年、第四一卷第三—四期）。
- 40 例えば、『苔莉』では、主人公の克歐は苔莉と南洋に駆け落ちできたらと想像する一方、村の女學生と結婚し、村人の賞賛を受ける幻想が浮かんでくる。